

# 座談会

日時：平成12年10月24日午後2時から4時

場所：綾瀬市役所 研究室1（6階）

出席者：

綾瀬小学校旧職員

池田 武治、比留川本吉、

加藤マサエ、鹿島 孝子、歌田タツ子

教育研究所

岡田 敏樹、比留間 實、加藤 吉裕

川口所長、神谷指導主事、清田研究員

（神谷） 先生方で19年に限らないで当時記憶によく残っている事があれば、ちょっとその辺のところお話し願いたいのですが。

（池田） あのそういう事であればお話がございまして、お話申

し上げたいと思います。

当直日誌を見まして、まず私が気が付いて思ったことは、当時の職員組織の件なんです。この当直日誌から顔ぶれを拾ってみたのですけど、月に何回当直に来てくれるかかってことを調

べてみたんです。とにかく男の先生が少なく、女の先生が多いんです。簡単に申し上げます、女の先生2に対して男の先生1と大体そんな割合です。という事は、どういう事だったんでしょうかね。



その時、年度の途中で応召された赤木（仮名）先生の後は、その後補充の先生が来ておるのですけれども、まあ当直の話もしましたけれど、月に多い方は…。20年の3月の例で申し上げますと、月に6回当直があるのですよ。月に6回ということは、5日に一回ということになりまして、それだけでも非常に先生方の負担は多かったです。しかも空襲が時々あると、警戒警報が鳴るとかということでした、とても大変だったのです。校長さんも当直を一回やってらっしゃるんだね。こういう職員組織があったから、当時の困難な状況を乗り切ることが出来たのだと思います。

それから今日、加藤マサエ先生が来ていらっしゃるけれど、それまではですね、4つの分校には必ず男の先生が1人ずつおられたんです。そういう職員配置を校長さんがしていらっしゃった。それが女ばかりになって、加藤マサエ先生が主任といいますか、分校長になって、3人で受け持っておられるというそんな状態でございます。まあそういう点からね、とにかく戦時中は男の手が足りないという事による教育界へ及ぼした影響ということを、大いに私は感じ取ったのですよ。

（比留川） ちょっと、宿直のことですね。これを見ると最初の方をご覧になると分かるように、日直から当直ということ、2人で組むんですけれど、戦争が激しくなってきた、20年の1月頃を見ていただければ分かるように、日直も2人、宿直も3人位でやっていらっしゃるといような事で、非常にまあ空襲とかいろいろあって、

緊迫した事態であったというふうを感じ取られるという事ですね。

そして、いまひとつ私を感じ取ったのは、この日宿直の方があの当時は、ご承知のように教育勅語が中心の教育でございますから、奉安殿がとにかく一番学校では大事なところというふうな事で、どここのところでも、「日直中、奉安殿内外異常なし」と、どこにでもこう書いてあります。奉安殿には御真影が入っていて、学校では一番大事な場所ということ、日直・宿直の方も奉安殿の安泰ということについては、非常に気を遣っていました。



奉安殿

(神谷) あの、当直は、女性の方はやらなかったわけですよ。

(鹿島) いいえ。していますね。男の先生が少なくなつて、あんまりにも回つてきてしまうというので、女性教師も宿直をいたしました。夜もいつ空襲警報が発令されるかわかりませんので、もんぺ姿に防空頭巾を枕許に置いて休みました。サイレンが鳴れば、直ぐに起きました。

(歌田) 男の人が少ないものね。女性も手伝わなくてはね。

(鹿島) ですから、女は3人ということだったわね。私達の時にはね。井上先生、教頭先生ですけど、お一人でございましたので、加藤えつこさんと私と井上先生の3人で頑張ってきました。終戦間際は、私達も当直致しました。

(歌田) 私は戦時中少しと、終戦直後は当直致しましたね。

(加藤マ) 終戦少し前でしたね。女が泊まるようになったのは。

(歌田) 終戦前後だったと思います。

(加藤マ) そうですね。

(鹿島) 戦後は、どんどん先生方が復員して来られたから人数が足りるようになりました。その終戦ちょっと前は、本当に男の先生が居られなくなりました。昭和20年の6月ごろからは、女性も宿直はあたり前でした。

(歌田) ですから時には、皆さんの食事の支度まで小使室でしていつてね。お米だけでは足りなくてサツマイモを刻んで入れて、おいも入りのご飯を炊いて、それを職員室に運んだのを覚えています。

(鹿島) そうですね。

(神谷) その場合、女性の方だけで泊まるんですか。男の方と一緒にペアになつてとか、また女の方3人位とか。

(鹿島) 女3人でやったわね。足りないときは、男の人も都合がつけば泊まって下さることもありました。



(歌田) 私も女性3人で当直をした記憶があります。回数は少ないですけどね。

私は、19年というのは、女学校卒業したてですね。学校へ、私なんか上の学校へ行きたくても、都内、東京の方に行くでしょ。「空襲で死に行かせるようなもの」だからと、上の学校へ行かせて貰えないんです。それで女学校を卒業して、家に居たつてだめ。結局、教員の資格をとって、地元の学校に勤めるのが一番安全だったのにも、もう、「それしかない」って祖父がそれに決めちゃって。その後、大矢校長先生が見えたときも、私はあまり気が進まず拒否してたけれど、当時の家長でもある祖父と大矢先生の熱意との合意の上、本当にもう、本人の進路なのに本人の希望も何にも無く、安全対策で決められちゃったということです。

当時の綾瀬小学校の大矢校長先生が3日連続で薦めに来られて、教員が足りないから、「あんた女学校出たてでもね、遊んでいるならたとえ半年でも良いから出てくれ」って言われて。とうとう断りきれないで、19年の4月に、数えの17歳でした、満でいうと16歳ですよ。何にも知らないのにね。あの時、大澤ゆうこ(仮名)先生で、3年生は80人近くいました。大澤ゆうこ(仮名)さんが1人で2クラス持っていて、あまりにも大変だから、「あんたが出てくれれば毎日2人でやれるから、何とか来てくれ、来てくれ」と、あの時の校長先生の熱心さに負けて。もう、何が何だか無我夢中でした。何にも知らない素人だね。学校へ行って私みたいに何にも知らないのが先生だなんて、生徒がなんと可哀想と思った。その気持ちを私、ひし

ひしと、今でも思い出すんです。

でも、生徒が「先生、先生」っていうからね。それからもう最初のうちは本当に落ち込んでいたんですけど、段々生徒の顔を見ていううちに、「ああ私がしっかりしなければこの子達が可哀想だ」と思うようになりました。私がつとちゃんとしなければ、しっかりしなければと、自分を一生懸命励まして、徐々に自信を取り戻そうと頑張つて来た様に思います。そういう精神的に大変辛い時期があった事を、今でもしみじみ思い出します。

(神谷) あの、歌田先生が行かれる前は、そうすると80名の子供ってというのは1人が教えていたってことですか。

(歌田) そうです。ですからその時、3年生は2クラスに分けて大澤ゆうこ(仮名)さんが1組で、私が2組で。その時はね、2年生がやっぱり70〜80人居ました。中島やえ(仮名)さんがそれを1人で受け持っていました。ですからもう、後ろの生徒の椅子が教室の後ろの壁に届いちゃうんです。ですから後ろが通れないんです。生徒が、1クラス一杯で。私達は、半分に分かれたから30何名から40名足らずで出来ましたけれど、その時2年生が大変な数で、やえさんが1人で受け持っていました。

(比留川) 今は定員というのが決まっていますが、あの当時は定員というのは決まっていなかったみたいですね。

(歌田) 決まっていなかったです。とにかく教員は不足勝ちで、男の先生が少なかったんですよ。



(比留川) ですから、旧制の高等女学校を出られただけの方が、先生になられるようになりました。そしてあの当時、文部省としても無資格じゃいけないというところで、県の男女師範学校で初等科訓導講習会を開いて、半年で初等科正教員の資格をくれたんですよ。速成にそういう処置をとられたよかったです。

(歌田) ほとんどが代用教員でしたね。

(鹿島) 戦争が激しくなりましたら、そういう風になりましたけど、私達の時は、まだそれほどでもなかったので、女学校を卒業しまして、その年の9月、鎌倉に男子の師範学校がございますので。そこで尋常科本科正教員の資格を得るための試験を受けまして、半年間、女子師範と男子師範とに分かれました。斉藤(仮名)さんは横浜の方の師範学校へ、私は鎌倉の方の師範学校へ。それこそ、毎日8時間の詰め込み教育ですけどね。終わると、検定試験を受け、教員の免許証を貰いました。

(歌田) 一年間位のお勉強を半年にね。ですから、朝真つ暗なうちに家を出るんですよ。6時頃、8時半にもう授業始まるからね。8時ちよっと過ぎに鎌倉師範に着かないと、授業に間に合わない。

それでね、授業遅くまでやっているから、家に帰ってくると真つ暗なのよ。一年間の勉強をね、半年にね、ギョウギョウ詰めに。内容が一杯あったから、師範の先生がよくこう言われました。「一年分の勉強なんだから、しっかり頑張りなさい。」と。

(加藤マ) 半年間勉強しまして、翌年の3月検定試験を受けて、それで尋常科本科正教員という免許を頂いて、それでこっちに來たんですよ。

(歌田) 前半は代用教員、後半に鎌倉師範に入って。20年の3月に卒業して、20年の4月に正教員として入ったわけですよ。

(加藤マ) あー、もう、昭和19年といえますとね、小学校の5年生・6年生は、ほとんど授業というのはいませんでしたね。勤労奉仕が多かったですね。陸軍の兵隊さんが駐屯してきましたから。そのお弁当運びとか、その馬の餌の草、まぐさっていうんですか、そのまぐさ取りを致しました。入梅の時には草が濡れてしまうので、学校の廊下へ草を並べて干して、馬の食料を作りました。

(歌田) よその学校の生徒も疎開していたわね。

(鹿島) 諏訪小学校。横須賀の諏訪小学校の児童、教師が疎開してきまして、お寺や神社の社務所等に泊まりました。

(歌田) 一時、師範学校の生徒も泊まっていました。

(神谷) 書いてありますね。

(歌田) 軍人さんも泊まっていたね。校舎もかなり使われていたから。音楽室も、新校舎の方の作法室とか、洋裁室など皆そういう人達が使っていたから、専門のお部屋が全然使えませんでしたね。



それから、何年だったかしら。陸軍少尉の人でピアノが大変上手な人が居て、私もう、憧れちゃった。でも、これは私一人ではなかったわね。

(鹿島) 兵隊さんが居ましてね、よくもう弾いて聞かせて下さってね。なんか音楽学校にいつてらっしゃった人がいて。少尉だったと思いますね。

(歌田) あの時、女の先生なんか、何人かで皆聴きに行っちゃったわね。

新校舎のむこうの端の方の音楽室。あそこでピアノを聴かせて頂いて、私印象に残っていたんです。素晴らしくお上手で。我々、教員の中であんなに弾ける人、1人もいなかった。はるかにレベルが高かった。私は師範に入った時、トルコ行進曲まで弾ければ、ママアという風によく言われたんですけどね。しかしその少尉の方は、我々の知らない数々の名曲を、悠然としかも豪快に演奏して聴かせてくださいました。私達は只々陶醉するばかりでした。

(加藤マ) バイエルがね、終われば良い方で。バイエルだったら63番位で終わりになってしまっただけで、上がらなかったですね。ですから、子供に教える場合も単音ですので、伴奏付けてなどとても弾けませんでした。

(比留間) 昔の先生の頃は、ピアノ教育はかなり女学校でやられましたか。

(加藤マ) いいえ、全然。戦争が始まって音楽のドレミファが、八二ホヘトイロ八になったりしました。

(神谷) その方は、軍事教練を担当されに來られたんですか。

(加藤マ) はい、そうです。

(神谷) 陸軍の部隊が駐屯されたのは、昭和20年からですか。

(加藤マ) 駐屯されたのは、19年。20年ではありません。18年のもう終わり頃には、駐屯していました。

(歌田) 私達は、女学校に入った途端敵国語廃止で、英語の勉強も全然してないの。英語の勉強始めた途端に、敵国語廃止になっちゃったのね。だから何にも分からない。ですから教職についてからあわててわたし、アルファベット、大文字・小文字から一生懸命全部勉強し直しました。

(鹿島) だって、代数とかね、三角形ABCというのがね、三角形イロ八になっちゃったんです。

(歌田) その上、終戦迄は勤労奉仕に費やす時間が多くて授業があまり無かったから、私達本当に勉強していない時期だと思う。そういう時期にぶつかって、私達の年代が一番だめだねって、いつも友達と話しています。

(加藤マ) ですから私達もね、英語はもう全然やりません。教科の中に入りません。

(池田) 第2に私が日誌を見て感じた事は、思い出つていいですか、なんでもね。書いてある事を総覧して考えますとね、戦時色一色という言葉が当てはまるんじゃないかなろうか、という感をもったんです。

不思議と思つたのは、「職員会議」ということの記述が、見当たらなかったことです。当時は、戦時色一色と今申し上げましたが、職員会議といわないで、常会といったんですよ。この言葉の出処については、いろいろ話がありますが、この「常会」という言葉は、二宮尊徳先生の教えから来ているんですね。とにかく二宮先生の報徳の精神は、多くの人に身に付けて、皆が寄り合いで話し合い、イモ堀式に良い案を作っていくということでした。それをどうしてか分かりませんが、そういう事から「職員会議」でなく、イモ堀式に職員が手を出し合っつて、という意味でもって「常会」と付けたと記憶しています。

とにかく、当時のなんといいますが、スローガンとすれば、「滅私奉公」、あるいは「率先垂範」でもって私共は、堅くそのそういうことを信条として勤務しましたね。後から振り返ってみると、お互いが一生懸命やりましたよ。それで、子供には子供向きの何といいますが、標語つていいですかスローガンつていうか、こんな言葉があるんですね。「欲しがりません、勝つまでは」、「賢沢は敵だ」。こういう、なんといいますが、思想といふんですか、世相といいますが。それが子供にもやっぱりしみこんでいるような、振り返ると感があります。子供はよく従順に言う事をきいてくれたかと思えます。先生方も一生懸命だった。「率先垂範」、それについて子供もね。今の学級崩壊なんてとんでもない事だと、当時としては夢にも考えられなかつた事なんです。で、そういう風に当直日誌を見まして思い出しました。

それと、もうこちらの方でもお調べになつていらつしやる戦時色という言葉を使いましたけれども、体育ですが、まず先生を教育しなければいけないというので、日誌にも書いてあるんですけど、なぎなた講習会が行われたり、柔・剣道の講習会が行われたりしました。

それから、職員に対する講習会は無かつたけれども、水泳が入ってきました。それで、相模川へ行つたんです。暑い中をね。調べてみましたらね、7月の3日、10日、13日、14日と4回行っているんですよ。初等科4年生以上が歩いてで



すよ。僕はこの当時、多分体育指導主任になってたんだと思うんですが、忘れてしまいました。無謀だったんですよ。今考えてみると。どこへ連れて行ってどの河原の岸でもって、この水泳指導をやるかという、事前調査や準備を充分しなかったですね。覚えていないですよ。とにかく水泳は、私が一番達者だったから、私が先頭でもってここなら良いだろうと場所を決めました。今の、そうですね、あゆみ橋の南ぐらいいのとこだったんだろ。まあ、綾瀬の子供はね、皆、陸の河童でね。目久尻川であまり泳いでなかったらしい。私は幸い目久尻川に近かったからね、子供の頃から泳ぎは普通には出来たんですよ。それ以前に相模原の方へ行きまして、泳いで相模川を横切ったことがあるのですよ。その時抜き手で泳ぎきったのは、2人つきりいなんです。他の子は皆、おっかながっちゃって。ですから、この生徒達は水を恐れちゃっているんですよ。確か、水泳指導の一番始めの練習は、洗面器だったかな。顔を水につけて、水に慣れるという事が、これが本当の最初の練習でした。みんな同じようにやっているんですけどね。綾瀬の子供は、もう第一にね、川に入るのを初め怖がつて、川に入ってくれないの。困っちゃたんですよ。で、まあそのうち、何人かは段々入ってみられましたが。で、その次に水に慣れるという目的で顔を水につけることをやったんですよ。でも、それすら出来る子と出来ない子がいました。本当に、印象的に思い出します。暑い中を4日間、海老名の河原まで歩いて、4年生以上が行きました。結構子供に対しては、難儀だったんじゃないかなと思います。そんな事を読みまして思い出したんですよ。

まあ、それから体育にまたかえりますけど、相撲が入ってきたん

です。綾瀬小学校の校庭の一番北の方へ土俵を造りましてね。私はその当時体育を教えていたんでしようかね。何を教えていたのか分かんないけど。で、中部7校の相撲大会があるんですよ。第1回は綾瀬小学校の校庭で行なわれました。その時うちの方の生徒は、なかなか強かった。ところが大和に1人だけ、なかなかがつりした体の子がいて、この生徒にはかなわなかった。綾瀬で強かったのは、小園の篠原しげとし(仮名)さんの弟さんなんです。篠原(仮名)君も、寄り倒して倒されてしまつて。

高等科2年は、自発的に校庭北側の常盤園の所に防空壕を作りましてね。1学級ぐらいは入れる大きさでして、重要書類をその中にしまつておきました。

それから、学校にも敵機がやって来て機銃掃射されました。流れ弾だと思いますが、校長室にも銃弾が打ち込まれました。でも、子供達は葉莖拾いに夢中になっていましたね。

(加藤マ) 綾北分校にはラジオが無かったので、近くの家まで聞きに行きました。時には防空壕に隠れることがありましたね。爆弾はあまり落ちませんでした。戦後米軍が基地を使うつもりだったの



中部7校連合体育大会記念写真(昭14)

ではないでしょうかね。

(鹿島) 履く物が無いので草履作りの講習会を行ないました。作った草履は、ちよつと遠い子は家に着くまでに擦り切れてしまったんですよ。雨の日は、裸足で来る子が多かったですね。学校の玄関横の水道で足を洗ってから教室に入ってくるんですよ。

(池田) 傘は何本か配給されましたが、直ぐ壊れてしまいました。ズック靴は60から70人に対して10足ぐらいしか配給されませんでした。靴は貴重品で大切なものだから、雨の日は懐に入れて持ってきていました。

二宮尊徳銅像建設に1銭寄付しました。軽かったので「ふつとぶ1銭」といっていました。

物資不足で、桑の皮を剥いで供出したり、繭なども供出しました。ラミー採集は家から乾燥した物を持ってきました。どんぐりも灰汁

を抜いて出荷しました。蝗採りは良くやりました。採った蝗は一晚袋の中に入れて糞を出させてから、翌日釜で茹でて筵に干しました。そして供出しました。

そのほか、大矢校長が基地指令官と掛け合つて、基地内に一五〇坪ほどの水田を借りました。泥田で深く作業は大変でした。高等科の生徒が作業にあたっていました。脱穀は農家から道具を借りて、



採集されたドングリの山

職員が行ないました。採れた米は供出しました。ジャガイモなども

作っていました。

勤労奉仕作業は、出征兵士の家の農作業手伝いや暗渠排水工事を行ないました。暗渠排水工事で地区によつては、かぼちゃんなどのおやつを出してくれました。

(鹿島) 冬になると午前中勉強で、午後は麦踏みをしました。麦踏みをしていない畑を、片っ端から麦踏みをしていきました。先生も生徒も一緒に夢中で、日の暮れない内にと麦踏みをしました。

(加藤マ) 矢部弥一という先生は、青年学校の先生。それから藤沢の市役所に長くお勤めになつていられました。青年学校が新校舎の方へ事務所を移しましたでしょ。その頃、来たんじゃないでしょうか。

(鹿島) 東山ともこ(仮名)さんってどこから来てらっしゃったか分からないんですが。

(歌田) いやー、私も、もう忘れちゃってわかんない。東山(仮名)さんって名前は覚えてるんだけど。顔も浮かんでこない。

(加藤マ) 大沢きえ(仮名)さんっていう人は、軍人さんの奥さんで、九州の人ですよ。ですから福岡かなんかの女子師範を出られた方なんですよ。

(池田) 高山よしきち(仮名)さんっていう人は。

(歌田) あの方も青年学校ですよ。山下ハツ(仮名)。

(池田) 諏訪の疎開学校の事は、校長さんがほとんどすべてやってしまっているから、僕らには記憶がないね。

(加藤マ) 教頭先生で、男の先生で、よく本校にお見えになられた方がありましたね。



(池田) 先生方はかなり知っていますよ。上の方の先生方は、皆、校長先生になられた。その後、ほとんど亡くなられたと、何かに出ていたね。

(比留間) それですすね、そつから学童疎開で早川の青年クラブってご存知ですか。場所。そこに宿泊供にしていた諏訪小学校の持田(仮名)先生、ご存知ですか。私共で調べさせて頂いて、昨年ちょっと行って来たのですよ。その先生、写真機をその当時持っていて、その写真がありましたので、一応コピーさせて頂いて持って来たのですけども、鍛錬会の写真だとか、早川の五社神社で慰安会みたいなのをやったようなものがありましたして、そういう写真がここにあるんですけども。私、聞きましたんですけど、腰塚笑美子(仮名)先生ですか。その先生はご存知のようでした。

(鹿島) 持田(仮名)先生がよく本校にお見えになって、校長先生とお話になったり。ですから連絡係というんでしょう。それをやってらっしゃったように見えました。

(比留間) 背も大きくないほうだね。

(池田) 良いかたでしたよ。なかなか風貌もよろしい方でしたね。整った方でしたね。写真機持っていたら席次は来ていらした先生方の中で、3番目か4番目位だったんですね。主席の先生は、ちよつと小太りでいらしてね。

(鹿島) 教務主任みたいな事を、持田(仮名)先生がやっていたらしゃつたのかね。そんなような記憶です。ですから本校へよくお見えになったんじゃないかなと。疎開が始まってからは、授業は2部制になりましたね。諏訪小学校の先生とは職員会議も懇親会も一緒にやりました。

疎開していた子供達のことでは、たまたま農家の人が疎開している子供に、「横須賀水道をずーっと辿って行くと横須賀に行ける」と言った為、何名かの児童は夜に横須賀目指して疎開先を抜け出してしまうって、大騒ぎになりました。最終的には長後あたりで保護されましたけど、可哀相でしたね。

(比留間) 青年学校、その早川青年会でやっていたのが、食事の世話をしていた、相田もとこ(仮名)さんっていう方なんですけどね。

早川の人かどうか分からないんですが、まだ調べてないんですが。ご存知であれば知りたいんですが。



(鹿島) 私達くらいの年代かね。私の記憶だとね。持田(仮名)先生って。なんでも、斉木ともよ(仮名)さんのお姉さんが、疎開場所にお手伝いに行ってもらえたという話は聞いたことがあるけれどね。あの、厚木航空隊の中に、田んぼや何かありました時間に、生徒が行きました。あの時に、横川しげは(仮名)先生の従兄弟にあたる人で、あの当時の海軍中尉だったと思います。西川しょうじ(仮名)っていう方があって、よく横川(仮名)先生の所へもお出でになったりなんかしていました。厚木航空隊の土地の買収ですか、そういうのを担当していなさった方がいらっしやっただけだね。用田の人で西川(仮名)さん、綾瀬のそばに、あの人の一番上のお兄さん。しょうじさんって方は本当の兄弟じゃなくて、むかしは預かりっ子っていうか、その人が可愛くって手放せなくなりました。用田で生活しておられました。だからね、横川(仮名)先生がご存命ならとても詳しいお話をして下さると思いますのに、残念です。井上先生、大塚重雄先生、安藤先生、半世紀以上だものね。

(神谷) 当時、子供達が楽しかったことってあると思うんですが、例えば天長節とかそういう時に、お汁粉が配られたとか。パンだったっけ、天長節は。明治節がお汁粉だったかな。

(鹿島) 本当に子供は喜びましたね。お汁粉ですからお椀を持っ

て、こう並ぶんですよ。あの、子供達。そうすると、先生方が鍋からあげるんですけども、やはりお玉の都合でね全く同じにはならないですよ。ですから、「この子にはちよつと少なかった」とか、「1cm少なかった」とかって言うかね、「先生、ひいきくれてんから、あれにはたんとやった」と、「おれはこれっきりだった」とかね。ということ、お団子でしょう、お餅だったかしら。お団子じゃなかったかしら。

(比留間) その前にですね、藤沢かなかにね、小麦粉を先生方で取りに行っているんですよ。

(鹿島) じゃあ、小麦の団子ですね。

(比留間) 小豆も藤沢でなくて茅ヶ崎へなんか、砂糖だけ取りに行っているんです。あれ、大変だったんだなと思います。

(鹿島) 本当にね、1cmでもね、そのお椀の高さが違うかね。もう慎重にね、こう計ってやらないと。1cmあれは多かった、上だったとか。そんな思い出がありますね。

(神谷) それは、電車で取りに行くわけですか。又は、歩いて。

(鹿島) あれは、柿崎さんが取りに行ってくれたんだけど、自転車じゃなかったでしょうかね。自転車しか他にそんなになかったですよ。